

千葉市が、市の子ども交流館で行っている「小中学生が模擬の店や公共機関を会場につくって大人の生活を実演し、実社会を学ぶ『まち』をつくり、そのまちづくりを通して、子どもたちに行政に対する声をあげてもらおう」という政治参画の試み。30年ほど前、ドイツで始まり、日本でも行う自治体が増えたといえます。

一昨年春、26の店や機関と「市民」400人が参加して実施。市長（任期1年）選挙も行われたそうで、この時、市長になったのが千葉市立高校3年の内海菜々花さん。

「まちをもっと大きくして、全国に知らせたい」と訴え、他の候補3人を抑えて当選。「大人は携帯電話が危ないというけど、子どもが使う施設に公衆電話がない」と会場で、本物の市長に要望したところ、「なるほど」と頷いた熊谷市長（32歳）。しばらくして、「まち」の活動拠点である子ども交流館に、公衆電話が設置されたのだそうです。

菜々花さんは、ビックリ。「言っても変わらないと思っていたけど、言わなきゃ変わらないんだ！！」と実感。その秋に行われた「まち」では、小児医療と児童虐待をテーマに熊谷市長と一緒に議論。「顔の知らない人に、いきなり相談はできないよ」との発言をきっかけに子どもが行きやすい相談場所はどこか…に発展。「近くに子どもが集まる場所があって、そこにカウンセラーがいる形がいい。それと、こういう場に学校の先生も来てほしい」と提言。普段の生活とは違うやりがい、しっかりゲットしたんでしょうね。

阪神大震災を高校時代に体験した熊谷市長は、考えるそうです。「子どもの声を聞かない大人が、教育の貧困の原因ではないか。子ども自身が社会に必要とされていると実感してもらおうことが大人の仕事で、広い意味での教育ではないか…」

子どもを調教すればすむと思う旧世代の政治家では絶望的。そこで、生徒会の選挙を見、生徒会長を集めたサミットを開いたりetc今、準備中なのは、信頼できる大人がいる「子どもカフェ」をモデル的につくることだそうです。

いやあ～、いいなあと思いませんか？のりこは、「スウェーデンの中学社会教科書」を愛読しているのですが、そこでは、子どもたちに、日常的に政治にアクセスすることを示し、納税者として、行政に対して、よりよいサービスを公平公正に提供を求めることは義務であり権利であることを教えています。

いわゆる「お勉強」ではなく、生活実感のある社会教育こそ、今、必要だと私も思います。先日、私あてに、市内の中学3年生から手紙が届きました。今回の合併に関しての意見、そして、自分も住民投票で1票を投じたかったとの内容でしたが、しっかりした意思表示に大きくうなずきました。頼もしいものです。

榊原市長も、もっと子どもたちに目をお向けになるべきだと、改めて思います。

名古屋市長選に立候補した石田芳弘さんが「議員内閣制」を公約に入れていました。

「現在の2元代表制は充分でない。議員を執行機関に兼務させ、予算編成に加われるようにする」というような内容のようですが、のりこは、今の制度で「議会の活性化」は充分やれるはず。できていないとすれば、議会がサボっているだけだと思います。

三重県議会の三谷議長にお話を聴く機会があり、ちょうど、その内容の1つが7日の中日新聞社説に紹介されていました。議会改革はいくつもあり、議員提案議案をどんどん増やしているのも注目されますが、定例会を年2回としたことの成果が大きいといえます。

08年3、4月のガソリン税暫定税率の期限切れをめぐる対応なども国の動きに応じて審議ができた。また、この3年間、知事の専決処分はゼロとのこと。要は、今の制度をいかに使いこなすか、ですよ。

年間240日ほど開会されているため、委員会も随時、継続的に行うことができ、公聴会なども開催できるし、県内市町村の長から意見聴取などの機会をもつことができるとも語っておられました。議員同士での議論は非常に活発だそうです。

2元代表制の下では、議会は常に野党であることが当然です。首長は、有権者によって予算編成権と人事権を与えられ、議会は、同じく、有権者によって首長を監視・チェックする役割が与えられているのですから、なんでも首長に迎合する「与党的立場」なんて、あり得ない話。

この点から言うなら、河村市長が「河村派議員を大量に議会に送り込んで減税を実現させる」を宣言するのは、オカシイと思います。河村派であれ、どうであれ、市長の発議に対して是々非々の議論を徹底させ、その上で賛成多数となるのなら、OKですけれど。最初から、市長の言う通り動く議員を認めては、2元代表制の否定以外の何者でもありません。